

## オーディオ実験室収載

### EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(8)(HP 収載)

#### —ThorensTD124 からの位相反転(1)—

##### 1. 始めに

前報(7)に引き続き、ThorensTD124 からの再生のトーンコントロールの調整に加えて位相反転を検討します。

##### 2. トーンコントロールの調整方法

前報(7)は、次のような配線でした。

LINN LP-12→ZANDEN Model 120→Leak Point 1(ライン入力)

→Brooklyn DAC+(ライン入力)→TruPhase

今回は、次のような配線とします。

ThorensTD124→ZANDEN Model 120→Leak Point 1(ライン入力)

→Brooklyn DAC+(ライン入力)→TruPhase

\* Leak Point 1 はトーンコントロール機能活用

\* Brooklyn DAC+は位相反転機能活用

使用するアナログ盤は、前報(5)と同じものです。レンジが広く倍音も豊かなピアノ曲と倍音が豊かなヴァイオリンとコントラバスのピチカートが入った曲を選んでみました。

LINN LP-12 には Magic Mat II を敷いておきます。

LONDON 360R 56009

モーツアルト ディベルティメント 17 番

ウイリー・ボスコフスキ指揮ウィーンモーツアルト合奏団

ドイツグラモフォン MG2366

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番

ウイルヘルム・ケンプ (ピアノ)

TRIO (ACharlin) PA1117

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番

エリック・ハイドシェックピアノ)

RCA M2S728

ショパン バラード G minor

ウラジミール・ホロヴィツ (ピアノ)

##### 3. トーンコントロールの調整結果

今回は、まず ZANDEN Model 120 で盤本来のイコライザー特性で聴いておき、RIAA の位相反転なしとして、Leak Point 1 のトーンコントロールと Brooklyn DAC+ の位相反転でどれだけ盤本来のイコライザー特性のような再生に近づくか調べることです。なお、Magic Mat II を TD124 に敷いておきます。

ボスコフスキー盤は、DECCA、R、第 4 時定数 High ですので、Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA と位相反転なしの再生で Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、バランスが崩れ、音の焦点が定まらない雑な音になります。トーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble を 3 時としますとバランスが戻り、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、バランスよく、音像が明瞭になって定位もよくなり、元の音に近づいてきます。

ケンプ盤は、TELDEC、R、第 4 時定数 Mid ですので Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA と位相反転なしの再生で Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、バランスが崩れ、打鍵のアタック感が後退し、音の焦点が定まりません。トーンコントロール調整の Treble を 3 時とし、Bass を 1 時にしますと、バランスと打鍵のアタック感が戻り、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、さらにアタック感が戻り、音の焦点があつて元の音に近づいてきます。

ハイドシェック盤は、EMI、R、第 4 時定数 Low ですので、Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA と位相反転なしの再生で Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、アタック感が後退し、低音の量感と明晰さが不足し、音の焦点が定まりません。トーンコントロール調整の Bass は 2 時、Treble を 3 時とし、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、アタック感、低音の量感と明晰さ、音の焦点などが元の音に近づいてきます。

ホロヴィッツ盤は、Columbia、R、第 4 時定数 Low ですので、Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA の再生で Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、高音のアタック感が後退し、低音の量感が不足し、高音から低音まで焦点がぼやけてしまします。トーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble を 3 時としますと、高音から低音までのバランスはよくなり、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、アタック感、低音の明晰さと量感が元のレベ

ルに近づいてきます。

以上から、トーンコントロールの調整に加えて位相反転することにより、盤本来のイコライザー特性ではない RIAA の位相反転なしの場合でも盤本来のイコライザー特性の音質に近づくことが分りました。ただし、カートリッジが Ortofon SPU Royal N の時代物の TD124 からのアンバランス出力ですので、全般的に音質的には LINN LP-12 からのバランス出力でのバランスアナログアキュライザー経由の再生の音質にはおよびません。

#### 4. まとめ

Thorens TD124 からの再生において、フォノステージが ZANDEN Model 120 であった前報(2)と(3)と前報(5)などのトーンコントロールの調整結果を、Leak Point 1 に応用し、併せて Brooklyn DAC+で位相反転することで、RIAА の位相反転なしの場合でも盤本来のイコライザー特性の音質に近づくことが分りました。

以上